

●あとがき

今回は小林泰彦(1947～)のステンレスによる彫刻展で新作16点の展示である。小林泰彦の展覧会は勿論当画廊では初めてであるが、しかし彼の作品は当画廊で唯一の常陳作品なのである。というのも入口にデンと座っている当画廊の看板は小林泰彦の作品だからである。街にはいろいろ看板はあるが、当画廊のそれは特別出来がよく立派だと時々ほめられるが、それは当然のことで、そこいらのものとは趣きを異にする。出来が違っているのである。毎日、朝夕、ゴロゴロと出し入れしているので、このところ愛着も一入である。実はこの看板・作品が大変気に入り塚田晴可さん(私の前にこのスペースで仕事をしていたギャラリー「アंक」の経営者)から譲ってもらった経緯があるのである。小林さんはこのスペースに以前から浅からぬ因縁があったといえよう。私の長年の友人である安福信二さん(ギャラリー「雲」の主人)は小林泰彦の作品を長い間見守ってきた人物であるが、その安福さんが推薦されるのである。一方私も二度アトリエを訪れ作品を拝見したが、最初私が感じていた一種温さというべきもの——これが小林泰彦の持味なのであろうが——が次第に厳しいものになってきているのに納得し、この展覧会となったのである。つまり二人の共同企画展である。

カタログのテキストは大島清次さんにお願ひし前掲の論稿「繊細さ(finesse)から幾何学(géométrie)へ」を頂戴した。厚く御礼申し上げる。文中、パスカルについて触れられ小林泰彦の本質に迫っておられる。私も久し振りにパスカルの名に触発され、遙かな昔高等学校の学生時代に金沢の下宿で読んだ三木清の「パスカルに於ける人間の研究」を憶い出したのである。三木清はパスカルが人間を「中間なるもの」として規定していることについて熱っぽく説いていたのを今なおなつかしく思い出す。正確、厳密な言い方で再現できないが、私流の解釈でひらたく言えば、人間は「聖と俗」、「天国と地獄」、「理想と現実」等両極点の中間を漂う存在である、とするのがパスカルの人間規定なのである。毎日、アクセクと動き廻り、酒をくらい、爆音をたてて睡り込んでしまう私の日常生活のなかでは、とても「バンセ」など読む精神的な余裕などないのであるが、それでも時として私の脳裡にこのパスカルの人間規定がよぎって行くことがある。人間の心は左右に揺れ動き一点に止まることはない。中間点をめぐる振幅の大きさを体験することが、人間としての存在を確固たらしめるのであろう……筆があらぬ方に滑ってしまったようだが、われわれ途上にある者、自分の方向を持ち続けられた時間のなかで仕事をする者にとって幾何学者にして神学者であったパスカルの言葉は含蓄が深いのである。

今回のカタログは作者と内田芳孝さんに作っていただいた。最後にこの展覧会を機に作者の一層の精進と進展を期待するものである。お互いに頑張りましょう。

昭和60年1月10日 佐谷画廊
佐谷和彦